

# 日中両国語の可能表現について

## ——自動詞の可能表現を中心に

龐 黔 林

## 要 約

### 試論日中兩國語言的可能表達形式 ——以自動詞的可能表達為中心

龐 黔林

除了某些本身就有可能含義的自動詞以外，日語中的大部分自動詞究竟能否表示可能，至今仍未有定論。但衆多的權威著作都未將其列入可能表達的範圍之內，初級日語教學也因此無所適從。由於日中兩文的差異，很多日語教師當遇到“テーブルが大きいから，トラックに入らない”這樣的句子時，都要為如何解釋躊躇一番。小論主要從如何理解這一問題的着眼點出發，對日中兩國語言中的可能表達進行了一點探討，希望能對教學有所幫助。小論的觀點是：在以中文為母語背景的教學環境下，認為與“入らない”用法類似的自動詞可以表示可能是可行的。但在教學中，主要還須注意從日中兩文語言習慣的不同出發，使學生較好地理解和掌握這一與中文有極大差異的用法。

自動詞的肯定式有時也有可能含義，但由於自動詞在否定式時含可能意思的例子占了絕大多數，因此對其肯定式時的含義未多加涉足。

## 1. はじめに

中国の日本語学習者に、

(1) テーブルが大きいから、トラックに入らない。

という文の中国語の意味は“桌子太大了，放不進車尾箱”だと説明したら、「先生，“放不進”というのを日本語に言い換えれば，“入れられない”ではありませんか。」とか、「いいえ，“入れない”というはずですよ。」とか言う学生がいた。確かに、この文の中の「入らない」は、中国語に訳すと、明らかに「放不進」という可能表現になる。しかし、日本語においては、「入らない」の代わりに可能表現の「入れられない」と言っても可能であるが、「入れない」とは言えない。このような問題は、一見非常に簡単のように見えるが、しかしなかなか解釈しにくい問題でもある。よって以下において、一体日本語の可能表現と中国語の可能表現とはそれぞれどんなものか、またどう違うのか、特に日本語の自動詞には可能的意味がどれほど含まれているのかについて考察してみたい。(中国語は便宜上日本の漢字で表記する。)

## 2. 日本語の可能表現と中国語の可能表現

まず日本語の可能表現と中国語の可能表現を簡単に触れておく。

### 2. 1. 日本語の可能表現

日本語の可能表現については、『日本語教育事典』(1982)には「そうすることができる」という意を表すとき用いる表現。①『できる』を用いる。『動作性名詞+ができる』、『修飾節+こと+ができる』の形で表す。②可能動詞を用いる。『読む』→『読める』、『歩く』→『歩ける』のように五段活用動詞を一段活用動詞に活用させると可能動詞になる。可能の表現として最も多く用いられる言い方である。他動詞の場合、助詞『を』は『が』に変えるのが普通である。③一段活用動詞、及び、動詞『来る』の未然形に助動詞『られる』を付ける。他動詞の場合、助詞の『を』は『が』に変えるのが普通である。④動詞『する』の場合は『できる』を用いる。⑤自動詞の『見える、聞こえる、分かる、入る、要る』などは可能的意を表すことがある。⑥『得(う)る』を接尾語的に用いて可能的意を表す。動詞の連用形に続く。⑦できないという意を表す言い方として『かねる、わけにはいかない』と言った言い方がある。そうすることが、ある事情でできない状態にある場合に用いる。」とある。

以上の外、五段動詞のように「見る」を「見れる」、「食べる」を「食べれる」、「来る」を「来れる」のような形にして可能的意を表す傾向が広まっているが、これはただ形の上での変化によるもので、意味の上には影響がないから、この考察の対象としない。

前掲可能表現の①～④も形の上の変化のみで、「来ることができる」と「来られる」、「読める」と「読むことができる」は意味の上では違いはあるが、中国の日本語学習者には習得しやすい。また⑥の「～得る」も「できる」という意味を持つてはいるが、「ありえない」のみが話し言葉としてよく用いられ、その他は文章語として使われるのが普通である。⑦の「～か

ねる」は中国語の「很難～」にあたり、「～わけにはいかない」は中国語の「不能～」にあたるから、習得するには別に問題がないと思う。中国の日本語学習者に一番習得しにくいのはやはり⑤の自動詞の類である。一体こういった自動詞はどの程度まで可能の意を表すかが問題の鍵になるのではないと思われる。

## 2. 2. 中国語の可能表現

中国語の場合、一口に「可能表現」と言っても、具体的な文においては、その文脈により、能力や性能、ある条件や事情による動作の実現、許可など、さまざまな意味で解釈される。例えば、

- (2) 腹がいっぱいで食べられない。
- (3) このきのこは毒があって食べられない。
- (4) 食堂が休みで何も食べられない。

などは動作主体や行為を受ける対象自身に何か可能にする性質が備わっている場合や、その場の状況がそのことを可能にする状態である場合など、その使う場合がいろいろ違うにもかかわらず、日本語で表現すると、「食べられる」一つで表せる。しかして、この3文を中国語に訳すと、それぞれ

- (2') 太飽了吃不下。
- (3') 這種蘑菇有毒不能吃。
- (4') 食堂休息，什麼也吃不到。

のようになる。つまり、中国語においては、行為の主体が何かを可能にする場合や、行為を受ける対象自身に何かを可能にする性質が備わっている場合、またその行為をする場の状況によって何かを可能にする場合など、その用法が違うことによって、表現も違うのである。すなわち、日本語の可能表現は、いかなる場合においてもほとんど同じ形で表現できるのに対して、中国語の可能表現は、その使う場合によって違う。よって以下はまず主な可能表現を少し触れてから考察を進めていく。

### 2. 2. 1. 助動詞による可能表現

このような可能表現をする主な助動詞は3つある。

#### 2. 2. 1. 1. 「能」

一口に「能」と言っても、その表現は、①行為の主体が体質的、性格的、習慣的に、そのことができるかどうかということを表す [例 (5)], ②ある事情や状況によって、それが可能であるかどうかということを表す [例 (6)], ③行為を受ける対象自体がそのような状態であるということを表す [例 (7)], ④行為の主体はそのことを実現する力や能力を持っているということを表す [例 (8)] など4種類ある。

- (5) 我不能吃雞蛋。
- (6) 「明天也能来嗎？」「明天不能来，不過後天能来。」
- (7) 自来水不能飲用。

(8) 他就算遇到困難, 也一定能克服。

## 2. 2. 1. 2. 「会」

「会」も、その意味用法は、①学習や練習により、技術や能力を獲得したので、ある事柄をなすことができる[例(9)], ②行為の主体が本能的に備えている能力の有無を表す[例(10)], ③可能性のあるなしを表す[例(11)] などある。

(9) 我会游泳。

(10) 鳥会飛。

(11) 他明天会来嗎？

## 2. 2. 1. 3. 「可以」

「可以」は、例えば文(12)、(13)のように、「～してもよい」、「～してはいけない」ということを表す。この中に、社会的慣習や周囲の事情によって認められる場合があり、「能」の用法②に類似する。

(12) 我可以進來嗎？(=能)

(13) 女生宿舍男生不可以隨便進。(=能)

## 2. 2. 2. 可能補語による可能表現

助動詞のほかに、中国語では、例(2')、(4')のようにいわゆる「可能補語」を用いて可能を表す言い方がある。しかも、この「可能補語」は、可能を表す助動詞より多く用いる傾向がある(特に否定の時)。

「可能補語」による可能表現は主として次の4種類ある(趙元任, 1979)。

### 2. 2. 2. 1. 動詞+「得」・「不」+「結果補語」または「方向補語」

これは最も多く使われている可能表現である。

中国語の動詞には働きかけという行為のみを表す動詞がその大部分を占めている。例えば、「放, 走, 説, 想, 掛, 燒, 提」などがそれである。こういった動詞はそれに状態変化の結果を表す「補語」を付けて始めて状態変化の実現という意味になる。例えば、

(14) かばんから財布を出す。

を中国語に訳すと「把錢包從書包里拿出来」になる。この「拿」という動詞はただ「手で持つ」という意味で、働きかけという行為を表し、それに「出来」(出てくる)という「補語」をつけて「財布をかばんの中から外へ出す。」という状態変化の実現を表すことになるのである。このような「補語」は「結果補語」と「方向補語」に分かれていて、それぞれの状態変化の意味を持つ。結果補語には、「上, 下, 尽, 開, 住, 滿, 光」などがあり、方向補語には、「上, 下, 進, 出, 回, 過, 起, 上来, 下来, 進來, 進去」などがあげられる。その使い方は、例えば、「關上([ドアを] しっかり閉める)」、「說出(言い出す)」、「喝光(飲みきる)」、「飛回来(飛んで戻ってくる)」、「想起(思い出す)」、「走過(歩いて通り過ぎる)」、「接過(受け取る)」、「看出(読みとる)」などがそれである。

動詞と方向補語または結果補語の間に「得」または「不」を挿入することによって、可能または不可能を表すことが多い。特に否定形式の方が肯定形式よりも多く使われる。この「得+

方向補語または結果補語」と「不+方向補語または結果補語」を「可能補語」という。例えば、「離不開（離れられない）」、「走不動（歩けない）」、「説不下去（言葉を続けることができない）」、「学不到（学ぶことができない）」、「買不起（買えない）」などの類である。

#### 2. 2. 2. 2. 「動詞+得+了または来」と「動詞+不+了または来」

このような補語による可能表現は、例えば、「合得来（性格が合う）」、「受不了（やりきれない）」、「説不来（言えない）」、「吃不了（食べきれない）」、「動不了（動けない）」、「忘不了（忘れられない）」などのようなものである。

#### 2. 2. 2. 3. 「動詞+得または不得」

この場合、肯定の方は可能表現になるが、否定の方は不可能か禁止の意味を表す。例えば、「吃得（食べられる）」、「説不得（しゃべってはいけない）」がそれである。

#### 2. 2. 2. 4. 固定的な可能補語。

可能補語の大部分は臨時的で、普通は動詞と結果補語または方向補語の間に可能・不可能を表す「得」または「不」を挿入することによるのであるが、このような臨時的な可能表現のほかに、可能的形式でしか使われない可能補語があり、例えば、「来得及，来不及（間に合う，間に合わない）」のような固定的な補語がそれである。ただし、「動詞+結果補語」の形の「来及」というような言い方はない。しかし、このような固定的な可能補語は相当少ない。

### 2. 3. 日本語の可能表現に対応する中国語の可能補語の多様さ

中国語の可能表現は大体以上のようなものである。それらの補語にはそれぞれの変化の意を表すため、同じ「食べられない」という意を表すのにも、中国語においては、それに対応する可能補語は、文が違うことによって異なる。例えば、

(15) 吃不起：法国菜太貴了，我吃不起（フランス料理が高くて食べられない）。

(16) 吃不上：小時候家里窮，經常吃不上米飯（小さいとき、生活が貧しくて、米で作ったご飯はめったに食べられない）。

(17) 吃不来：納豆我吃不来（納豆は[その味になれなくて] 食べられない）。

(18) 吃不下：我太飽了，吃不下了（お腹いっぱいでは食べられない）。

(19) 吃不完＝吃不了：飯煮得太多，吃不完（作ったご飯が多すぎて食べきれない）。

(20) 吃不到＝吃不着：在日本吃不到正宗的四川菜（日本では本場の四川料理が[ないので] 食べられない）。

(21) 吃不得＝不能吃：我胃不好，吃不得海鮮（胃がよくないので海鮮が食べられない）。

さて、冒頭にあげた例文（1）「テーブルが大きいから、トラックに入らない。」は中国語で「桌子太大了，放不進車尾箱。」になるが、「放」は「入れる」という動作の働きかけを表し、方向補語「進」は人や物がその動作によって外から内に入ることを表す。その動詞「放」と、方向補語「進」の間に「不」を挿入した「放不進」は、「テーブルがトラックに入る」ということが実現できない、つまり不可能という意を表すのである。よって中国の日本語学習者は「放不進」は日本語で可能表現の代わりに、「入る」の否定形式である「入らない」を用いるのが

納得できないのである。

### 3. 日本語における可能動詞的ニュアンスを伴う自動詞

日本語の自動詞には、可能の意味を持つものがある。それについて、中国語と関連して考察してみたい。

#### 3. 1. 「はいる」について

『日本語教育事典』(1989)の日本語の可能表現項の⑤に、「自動詞の『見える、聞こえる、分かる、入る、要る』などは可能の意を表すことがある。」とある。一方、『国語大辞典』では、「入る」について、「①ある物の中に収まる。含まれる。②また、つめこんだり、収容したりすることができる。」という解釈がある。確かに、例えば、

(22) 五万人は入る球場。

(23) このかばんはあまり入らない。

ような文を見て、「入る」には可能の意を表すことがあるということは何となく分かるようである。つまり、文(22)(23)中の「入る」、「入らない」は、球場そのものが五万人を収容することができる状態だ、かばんそのものがたくさんの物を詰め込んだりすることができない状態だという意味を表すと考えられる。しかしながら、文(1)の「テーブルが大きいから、トラックに入らない」という文の中の「入らない」も、テーブルはそれ自身の大ききで何かを収容したりすることができない状態だという意味を表すと理解することができないであろう。(22)(23)の「入る」は前掲『国語大辞典』の②の解釈のように可能の意を表すと見てよいが、文(1)の「入らない」は、その文全体の意味から考えると、②の解釈ではなく、①の解釈に当たると見ざるを得ない。

そして、「見える、聞こえる、分かる」も、その言葉自身に可能の意が含まれているが、「要る」は必要とするという意味で、どうしても可能の意を表すことがあるとは考えられない。ただ金田一春彦(1979)の考えられた状態動詞として見た方が分かりやすいと思う。したがって、文(1)の「入らない」は、『日本語教育事典』の可能表現項の⑤の自動詞に属していないことは明らかになると思われる。

#### 3. 2. 文(1)の「入らない」と同じ意味の動詞

文(1)の「入らない」と同じ意味用法の動詞は、日本語には多くある。例えば「あがる、開く、集まる、動く、かかる、決まる、出る」などがそれである。次の例からも、同じ可能の意味を持っていることが分かる(例文は主に『外国人のための基本語用例辞典』によった)。

(24) 三十分運動したから、手が上がらなくなってきた。

(25) マッチが水にぬれてつかない。

(26) ちっとも勉強しないので、成績が上がらない。

(27) 会費が集まらないので、会の仕事ができない。

(28) 停電で電車が動かない。

(29) 寒いので車のエンジンがなかなかかからない。

(30) 誰を代表にするか、なかなか決まらない。

(31) ご飯を食べていないから、力少しも出ない。

以上の例文からも分かるように、こういった動詞は、打ち消しの形では可能動詞的に使われるし、また、主語が全部非情物であることであり、全部自動詞で、無意志動詞である。日本語では、非情物を主体として使う場合、自動詞であると同時に無意志動詞を使うが、その現象をひきおこした人間の動作として表現する場合、他動詞で意志動詞を使うという例が多い。こういう自動詞と対応する他動詞はみなそうである。例えば、

{あがる・あげる}	{開く・開ける}	{集まる・集める}
{動く・動ける}	{かかる・かける}	{決まる・決める}
{続く・続ける}	{出る・出す}	{乾く・乾かす}
{くずれる・くずす}	{こわれる・こわす}	{あく・あける}
{さめる・さます}	{たまる・ためる}	{ちぢむ・ちぢめる}
{流れる・ながす}	{深まる・深める}	{ふえる・ふやす}
{広がる・広げる}		

などがそれである。

こういった自動詞にはその対応する他動詞の表す行為の結果、その行為を受ける対象におこる変化を表すものが多い。否定形式に使われる場合、その行為の対象物がその結果や変化に達成することができない状態にあるという意味を表す。これは中国の日本語学習者にとって理解に苦しいところである。これが理解できれば、文(1)の「入らない」も自ずから理解できるのである。自動詞の研究は、このような否定表現の時など、「可能動詞的なニュアンスを伴う」(宮島達夫, 1979: 511) ことのある自動詞をもっと浸透的にみるべきものであると思われる。

## 4. 可能表現の成立する文法的条件における中国語と日本語の違い

### 4. 1. 中日両国語における文の主体の差による可能表現の違い

日本語の可能表現の成立する文法的条件については、いろいろな考え方があるが、その共通のところは次の二点であると思う。①可能表現が成立するためには、その可能な状態にあるもの、或いはその動作をする能力があるものは、有情物でなければならない。②可能態をとることのできる動詞は意志的動作を表すものでなければならない。

「降る、生まれる」など、それにこの文章に挙げられた非情物が主体であるときの非意志的自動詞など、つまり、文法的条件②に属してない動詞は日本語では可能態をとることができない。例えば、同じ「入る」であっても、文(1)の主体は非情物であるから、非意志的自動詞で可能表現をとることができないが、

(32) ペットを飼う人だけが入れないそうです。

という文には、主体は有情物で、「入る」が意志動詞であるため、可能表現ができるのである。また前掲例文(24)～(31)の場合、可能表現で表す可能性もあるが、そうするにはまずそれ



らの非意志的自動詞を意志的他動詞に変えなければならない。それなら、主体も自然に有情物になるわけである。但し、それらの文を「他動詞+ことができない」とかの可能表現で表せば、ニュアンスが少々変わってくる。そのニュアンスの微妙な差はここで考察の対象としない。

ところが、それに対して、中国語はどうなるか、文(24)～(31)の中国語訳文を見てみよう。

(24') 運動了三十分钟手举不起来了。

(25') 火柴湿了水, 点不着。

(26') 一点也不学习, 所以成绩上不去。

(27') 收不到会费, 所以会的工作开展不了。

(28') 由于停电, 电车动不了。

(29') 太冷了, 汽车发动机老发动不起来。

(30') 总定不下来由谁作代表。

(31') 没吃饭, 所以力气一点也使不出来。

のようになり、全部可能表現をとって表すのである。その中に、他動詞の可能表現はほとんどであるが、文(26')(28')のように、主体が「成績」か「電車」のような非情物であっても、非意志的自動詞「上」か「動」を使って可能表現をとることもある。

即ち、中国語においては、主体が有情物である可能表現をとる傾向が強いが、主体が非情物である場合でも、日本語と違って非意志的自動詞を使った可能表現をとることもできる。

#### 4. 2. 日本語では可能表現できないものも中国語ではできる

例えば、

(33) 電話を何度も掛けても、かからない。

(34) 雨が降り続けているので、洗濯物はなかなか乾かない。

(35) 根気が続かなくなって、勉強をやめてしまった。

この三つの文は可能表現「他動詞+ことができない」とかをとることは不可能である。この場合、事柄の成立、つまりその「続く、かかる、乾く」の状態に達することは有情物人間の意志でコントロールできないことだからである。しかし、中国語で表すと、

(33') 打了好几次电话都打不通。

(34') 一直下雨, 衣服总干不了。

(35') 因坚持不下去而放弃了学业。

のように、可能表現にすることができるのである。

そのほか、中国語においては例えば、

(36) 我看雨一时半会儿还下不了。

(37) 这事儿能成。

のように、可能表現を用いて推し測る意を表す表現もある。

以上の考察からも分かるように、中国語と日本語は可能表現の成立する文法的条件において

違うところがあるのである。

## 5. 可能表現からみる日中両語の言語習慣

### 5. 1. 「可能」に関する意味的理解

「そうすることができる」という可能表現の中心的意味について、寺村秀夫(1989:269)は「日本語の可能態の表している中心的な意味は、『なになにしようと思えば、その実現についてさまたげるものはない』ということだと言っていいかと思う。」と述べられている。この意味は2. 2. の中国語の助動詞の「能」, 「可以」の用法において述べた「周囲の状態や条件が許すので、あることがらをすることができる」とほぼ同じことだと思われる。たとえば、

(38) 魯鎮の酒店の格局, 是和別處不同的: 都是當街一個曲尺形的大櫃台, 里面預備着熱水, 可以隨時溫酒。……儻肯多花一文, 便可以買一碟鹽煮筍, 或者茴香豆, 做下酒物了, 如果出到十幾文, 那就能買一樣葷菜, ……。(魯迅『孔乙己』)

のような中国語の可能表現を日本語に訳す場合、同じく可能表現をとればいいのである。

それから、文(24)～(31)に対して、可能的なニュアンスを伴うという日本人の理解からも、「可能」に関する中心的意味には大した相違がないと思われる。

### 5. 2. 可能表現からみる日中両国の言語習慣の違い

「可能」に対する中心的意味の理解については大した相違がないとは言えるものの、文(24)～(31)は言語学者は可能表現とされていないのも事実である。そういった自動詞の否定形式には可能的なニュアンスを伴うと言えるのみで、もう一歩進んで「可能表現」までとは言えないのである。

ここに日中両国の言語習慣の違いがみられると思う。それは「中国語は能動的、意志表示的な表現をとることが多いのに対して、日本語は意志や要望などを表す場合を除き、客観的、自発的(自然発生的)、状態描写的な表現形式をとるのが普通のようなのである」(遠藤紹徳, 1990)。文(24)～(31)はまさにそうである。たとえ可能表現の「他動詞+ことができない」に言い換えられても、やはり客観的叙述とする自動詞の否定形式をとるのが好ましい傾向である。次の二つの文を比べてみよう。

(39) 鍵をなくして、カバンを開けることができません。

(40) 熱い物を入れると、ふたが開かなくなることがあります。(弁当箱の場合)

無論、文(40)は「ふたが開けられなくなることがあります」と言い換えることも可能であるが、こうした場合、人為的原因と分けて、自動詞の否定形式をとることが優先に考えられているようである。

ところが、中国語においては、「何かをしようと思えば、さまたげるものがあって実現できない」という場合だったら、その原因が人為的であっても、人為的でなくても、意志表示的に同じ他動詞を使って可能表現をとるのが普通である。文(39)、(40)を中国語に訳すと

(39') 鑰匙丟了, 打不開皮包。

(40') 放熱東西進去的話, 有時會打不開蓋子。

になる。次の文もそうである。

(41) 卵を立てたけれども, 立たなかった (立雞蛋立不起來)。

(42) 火をつけたけれども, つかなかった (点火点不着)。

(43) (ドアを) 押したけれども, 動かなかった (推門推不開)。

ただ, ある状況を見て, 客観的描写をする場合のみ自動詞を用いた可能表現をとる。文(26') (28') がそうである。また例えば,

(44) 眠くて目が開かない (困得眼都睜不開)。

のように, 実際に言語表現をする時, 日中両国のこの言語習慣の差を考えた上でしなければならぬ。

### 5. 3. アスペクトから見た中国語の可能表現

ここまで見れば, 中国語の可能表現は日本語より応用範囲がずっと広いと思われるであろうが, また少し違うところもある。それはアスペクトを考えた場合である。

可能表現は現在未来形では, 現在における可能性, 能力を表すのが普通である。これは中国語においても日本語においてもほぼ同じであろうと思われる。例えば,

(45) あなたは英語が話せますか? (你会說英語嗎?)

(46) おなかが痛くて, 歩けません。(肚子痛得走不動。)

過去形での可能表現は, 過去の特定の時間における可能性, 能力の実現を表すのが普通である。例えば,

(47) 私は昨日病気で食べられなかったが, 今日食べられるようになった (我昨天生病不能吃, 今天能吃了)。

のような文である。中国語においては, 助動詞「能, 会, 可以」は大体そうである。しかしながら, 「可能補語」はそうではないようである。例えば,

(48) 担心考不上 (試験に受からないのが心配だ)。

(49) 考上了 (試験に受かった)。

(50) 没考上 (試験に受からなかった)。

(51) 桌子太大了, 放不進去 (テーブルが大きいから, 入らない)。

(52) 桌子太大了, 没放進去 (テーブルが大きいから, 入らなかった)。

未来または現在における可能的状態を表す, いわゆる現在未来形の場合, 文 (48) (51) のように, 「可能補語」を用いるが; 過去における場合, 文 (49) (50) (52) のように「可能補語」の代わりに, 「結果補語」や「方向補語」を用いて, その後に完了を表す助詞「了」をつけて肯定を表し, その前に「没」をつけて否定を表すことがある。日本語においては

(53) 昨日の授業で先生の質問に答えられた (昨天的課堂上, 老師的提問我答上来了)。

(54) 大丈夫, 彼はきっと答えられるから (沒問題, 他一定答得上来)。

のように同じ可能表現「答えられる」を使った文でも, 中国語においては, 過去形の場合は「答

上来了」といい、未来形の場合は「答得上来」という。

つまり、過去形においては、中国語は可能表現をとらなくなることがある。これは前に述べたように中国語の「動詞＋結果補語または方向補語」が既に状態変化の結果の意を持って、可能性、能力の実現を表しているからであろう。よって「答得上来」は「可能補語」として可能の状態を表すのに対して、「答上来了」は「方向補語」として可能の実現（つまり結果）を表すことになる。

こういったことから、中国語においては、「能動的、意志表示的な表現をとることが多い」ことに応じて、過去における動作について、可能か不可能かよりその動作が実現されているかどうかが先に考えられ、いわゆる「結果重視」という発想があるということが分かる。

ここでは、「動詞＋結果補語または方向補語」の後に「了」をつけ、または前に「没」をつけることによって、「可能補語」の過去形になるのではないかという考えも出来そうだが、同じ過去形の場合でも、それは可能の状態か、可能の実現かに即して違う表現をとるのが中国語の可能表現の特徴の一つだと言えよう。例えば

(55) 子供は前食べられなかったピーマンは今食べられるようになった。

の中の「食べられなかった」は過去形であるが、可能の状態を表しているから、中国語に訳すと「可能補語」をとって、「小孩以前吃不了下青椒，現在能吃了」になるであろう。また

(56) 子供は今日もピーマンを食べられなかった。

の中の「食べられなかった」は可能の結果を表しているから、中国語で言えば、「方向補語」をとって「孩子今天又没吃下青椒」になるはずである。

## 6. 終わりに

言語習慣からみれば、中国語はよく他動詞を使って主観的な可能表現をするのに対して、日本語はよく自動詞を使って、客観的な表現をする。

そのほかに、また例えば、

(57) 冬が来て木の葉はみな落ちた。窓を開けても、私たちは緑が目に入らない(冬天来了，樹葉全落光了。打開窗戶也看不到綠色)。

(58) 人間関係がうまくゆかない(人與人之間的關係搞不好)。

(59) 無理なことは長続きしない(勉強的事情是持久不了的)。

(60) こんな仕事には身がはいらない。(對這種工作提不起勁。)

のような日本語においては決まり文句であるが、中国語では可能表現になることもある。

なお、日本語に「受かる、助かる、勤まる、もうかる」のように、可能な状態にある物は有情物であっても本人の力ではどうにもならないものの場合に使われる可能動詞的なものがある。これらの動詞を中国語に訳す場合、可能表現をとるのが普通である。

受かる→(考得上)，助かる→(得救)，勤まる→(能勝任)，もうかる→(能賺錢)

以上の考察で、同じ可能表現といっても、中日両国語はその言語習慣が違うことにより、具

体的な表現の仕方も異なってくるのである。特に日本語の自動詞の使い方とその表す意味の理解には差が大であることが分かる。

**参考文献：**

- 荒屋勸編訳（1986），『日本人の誤りやすい中国語表現300例』，光生館  
須賀一好・早津恵美子（1995），『動詞の自他』，ひつじ書房  
趙元任（1979），『漢語口語語法』，商務印書館  
川本茂雄、国廣哲弥、林大編（1979），『日本の言語学 第五卷』，大修館書店  
寺村秀夫（1989），『日本語のシンタクスと意味 I』，くろしお出版  
日本語教育学会編（1982），『日本語教育事典』，大修館書店  
遠藤紹徳、武吉次郎編著（1990），『新編・東方中国語講座 第四巻 翻訳篇』，東方書店  
宮島達夫（1972），『動詞の意味・用法の記述的研究』，秀英出版  
森田良行（1995），『日本語の視点』，創拓社  
尚学図書編集（1981），『国語大辞典』，小学館  
呂叔湘（1992），『中国語用例辞典』，東方書店

（原稿受理1998年11月27日）